

# Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／山崎美奈子 撮影／刑部友康

## 農学は「生きるを支える」学問。 社会の期待を正面から受け止め、 大胆な進化を重ねる

**当**然のことですが、人間の命は「食」によって養われており、食糧の生産は国の基本です。農業を支える学問として生まれた農学は、すべての人にかかわる、「生きるを支える」学問なのです。その「生きるを支える」農学は、文化や社会、さまざまな領域の科学技術と密接なかわりをもちながら発展してきました。現在では、農学＝農業支援という枠組みをはるかに超え、地域や社会、世界に貢献すべく進化を重ねています。東京農業大学が約20年前から取り組んでいる、アフリカ・ジブチ共和国における沙漠緑化プロジェクトは、その好例。本学が長年培ってきた農業土木や農業機械技術を応用し、生物生産のた

めの環境保全に取り組んでいます。環境問題は日本にとっても大きな課題です。世界が抱える気候変動や環境破壊等の諸問題を根本的に解決するための研究や取り組み、そして、自ら考え行動することのできる人材の育成など、農学とそれを担う大学への期待はさらに高まっています。日本が直面している少子高齢化への取り組みも同様です。東京農業大学は、複雑化し細分化した現代社会をしつかりと見据え、社会と人々の期待に応えるべく、学びの領域や仕組みを含めた、大胆な改革をしつかりと計画し、実現していきたいと考えています。

その一方、東京農業大学には「不

変」のものがありません。それは1891年の創立当初から教育理念として貫いてきた「実学主義」です。実学主義とは先入観にとらわれたり、観念論に陥ったりせず、「あるがままを学ぶこと」。自然界に目を向ければ、そこには人知を超えた摂理があり、多くの生命の犠牲のうえに成り立っている人間の命もその一環です。初代学長横井時敬が残した「農学栄えて、農業滅ぶ」という警句の意味を、学生たちに学びとってほしいと思います。農学の進展は農業の発展に寄与するものでなければなりません。

東京農業大学の創立者 榎本武揚も、初代学長の横井時敬も、時代の変革期に生を受け、その時代を力いっぱい生き抜きました。その原動力は、「生きるを支える」学問への真摯な思いと、「人々が幸せに生きることのできる社会を作りたい。それを担う優れた人材を育てたい」という熱い情熱だと、私は思っています。

農学には社会を変える力があります。私は学長として、その事実と世界の人々の期待を真正面から受け止め、東京農業大学をさらなる進化へと導いていきたいと願っています。

東京農業大学  
東京農業大学短期大学部  
学長  
高野克己



【学長プロフィール】たかの・かつみ●1953年生まれ。東京農業大学農学部卒業。同大学院農学研究科博士前期課程修了。85年農学博士。95年同大学教授。同生涯学習センター長、エクステンションセンター長、学生サービスセンター長、応用生物科学部長、副学長を経て2013年より現職。

【大学プロフィール】1891年、徳川育英会を母体とした私立育英校農業科として創設。世田谷・厚木・オホーツクの3キャンパスに、農学部、応用生物科学部、地域環境科学部、国際食料情報学部、生物産業学部の5学部ほか、大学院、短期大学部を設置。